

氏名(本籍)	わた なべ てる や (広島県)		
学位の種類	博 士 (コーチング学)		
学位記番号	博 甲 第 5515 号		
学位授与年月日	平成 22 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	走高跳におけるスピードフロップの類型化に関する研究		
主査	筑波大学教授	博士(体育科学)	尾 縣 貢
副査	筑波大学教授	博士(体育科学)	朝 岡 正 雄
副査	筑波大学教授		宮 下 憲
副査	筑波大学准教授	博士(学術)	藤 井 範 久

論 文 の 内 容 の 要 旨

(目的)

走高跳では課題達成にかかわる動きかたそのものが達成記録を大きく左右する。それゆえ走高跳のトレーニングにおいては、技術トレーニングが重要な役割を果たすことになる。技術トレーニングを効果的に実施する上で、理想モデルとして掲げることのできる合理的な仕方を具体的に把握することはきわめて重要な意味をもっている。それゆえ本研究の目的は、走高跳において世界的に主流となりつつあるスピードフロップについて、理想モデルとして取り上げることのできる助走と踏切の仕方を具体的に提示することにある。

(対象と方法)

この目的を達成するために、第Ⅱ章では、走高跳の技術分析をテーマとした先行研究が、学術的な体裁を持つものだけでなく実践場面から発表されたものも含めて網羅的に整理された。第Ⅲ章では、走高跳の技術分析においてこれまで曖昧なままに放置されてきたスピードフロップの外延構造を把握するために、はじめに、スピードフロップとパワーフロップという従来の技術タイプの発生プロセスについて考察が加えられた。続いて、背面跳びが誕生してから今日までに活躍した 36 名の一流男子走高跳選手の跳躍フォームの質的運動分析が行われた。第Ⅳ章では、第Ⅲ章で得られた知見に基づいて、スピードフロップを用いる 16 名の一流男子走高跳選手が考察対象者に選定された。続いて、考察対象者の跳躍フォームの質的および量的運動分析が行われた。

(結果と考察)

第Ⅱ章では、まず、走高跳における従来の技術分析に内在される問題点が明らかにされた。これに続いて、スピードフロップの合理的な仕方を具体的に提示するには、スピードフロップの外延構造を明らかにした上で、スピードフロップを行っている一流選手を考察対象者に上げ、その考察対象者が行っているスピードフロップの類型化を行う必要があることが明らかにされた。第Ⅲ章では、まず、スピードフロップをパワーフロップから区別するには、跳躍フォームに「ベリーロールの要素」が取り入れられているか否かという点に注目する必要があることが明らかにされた。続いて、この観点に基づいて考察対象者の跳躍フォームの特徴を記述し、それらを相互に比較することによって、今日の一流男子走高跳選手が行っている背面跳びは「パ

ワーフロップA]、「パワーフロップB]、「スピード・パワーフロップ]、そして「スピードフロップ」という4つのタイプへと類型化できることが明らかにされ、これによってスピードフロップの外延構造が把握された。第IV章では、はじめに、考察対象者が行っているスピードフロップの踏切動作は「突っ張り型」と「踏みしめ型」という2つのタイプへと類型化できることが明らかにされた。続いて、この結果に基づいて助走の量的運動分析と質的運動分析が行われ、考察対象者が行っているスピードフロップの場合には、踏切動作における「突っ張り型」と「踏みしめ型」のそれぞれに対応する、「ギアシフト型」と「リズム型」という2つのタイプの助走を区分できることが明らかにされた。さらに、これらの結果に基づいて、今日の一流男子走高跳選手が行っているスピードフロップは、「ギアシフト型」の助走から「突っ張り型」の踏切を行う「スピードフロップA」と、「リズム型」の助走から「踏みしめ型」の踏切を行う「スピードフロップB」という2つのタイプへと類型化できることが明らかにされた。最後に第V章として、スピードフロップにおける2つの技術類型の特徴が具体的に提示されるとともに、得られた研究結果に基づいて、走高跳の技術トレーニングと体力トレーニングに関する実践への示唆がまとめられた。

(結論)

以上の考察を通して、本研究では以下のことが明らかにされた。(1) スピードフロップとは「ベリーロールの要素」が取り入れられていない背面跳びのことである。(2) 今日の一流男子走高跳選手たちの間で用いられているスピードフロップは、助走と踏切の仕方が質的に異なる2つのタイプへと類型化することができる。(3) この2つのタイプのスピードフロップは、いずれも現段階でもっとも目的に合った課題達成法であり、技術トレーニングにおける理想モデルとして取り上げることができる。(4) 走高跳の指導者は、選手の身体的特性(筋組成など)を十分考慮した上で、この2つの技術類型のどちらを理想モデルとして取り上げるべきかを決定する必要がある。(5) 理想モデルのタイプの違いに基づいて、体力トレーニングの目標や方法は大きく変化させられなければならない。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は、スポーツ運動学の手法を用いて、走高跳の背面跳を助走と踏切り動作からタイプ分けし、それぞれの特徴を明確にした上で、体力トレーニングのあり方についてまで言及した。指導現場に活かせる知見を多く得たという点で高く評価できる。今後は、得られた知見をもとに構築したトレーニングの効果について検討することで、応用研究へと発展させることが期待される。

よって、著者は博士(コーチング学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。